

第1次、第2次鯖漁場調査報告書

(1957年11月30日～12月8日)
* 12月13日～15日

(第1次試験)

(1) 経過報告

1957年11月13日出漁準備を終え午後5時20分泊港出帆、同日
50分阿波連港に寄港(臨時漁夫傭入のため)

12月1日 漁夫7名傭入、午前10時55分漁場向阿波連出帆

12月2日 18時30分東経124°56' 北緯27度50分の漁場に到着
18時50分より集魚灯同時撒餌開始、操業5分後群極めて小さい群が表面
近くを浮上し撒餌に時々喰付く状況を見受けたが釣餌に対する喰付は至って不
良で13尾釣獲後魚群は間もなく逃逸してしまつた。当時の水温19.8℃

※ 第二回操業 東経124°56' 北緯27°55'

当地点は第1回調査位置より南4裡に位し20時15分より集魚灯の点灯
並びに撒餌を投入前同と同様5～6分後鯖小群浮上当初は群も小さく火光に
落着かず游泳速度速く撒餌状態も悪かつたが時間が経つに従つて群も次第に
増大し、又餌付も良くなり火光に稍々落着きを見せたが、送電用スイッチの
ヒューズが断線依つて集魚灯は消滅し魚群は逃逸した。水温20.0度C
以後早急に「ヒューズ」の取り替を終え発電機を始動しようとしたが調子悪
く作動迄1時間余を経過してから再び附近にて操業したが集魚しなかつた。
漁獲28尾

※ 第三回操業 東経124°53' 北緯27°55'

第二回目の調査位置から西(西)3.5裡離れた地点で零時25分から約1
時間操業したが見込みなかつた。

※ 第四回操業 東経124°57' 北緯27°59' (第1回操業位置附近)

当地点は前回漁場より北東3裡の地点で第1回操業位置の東方1裡附近に居
り調査した結果表面水温は20.4度で今回の最高温度を示し適温帯と考え午
前5時5分より操業開始し15分後鯖群は浮上し第2回同操業当初は撒餌状態
が悪く火先にも落着かず釣獲困難であつたが次第に喰付状況が良好となりつ
つある発電機のガスケットが切断した為同機も使用に堪えなくなり音しい
所で鯖群は逃逸してしまつた。以後応急処置を講じたが見込みなお止むなく
調査を打ち切り帰路につき12月6日午後2時15分泊港へ帰港した。

漁獲 20 尾

(第 2 次試験)

- 12月13日 出漁準備及び発電機の整備を完了し午後1時55分泊港を出帆、同4時55分阿波連寄港前区同機臨時漁夫備入の為
- 12月14日 海上注意報発令後風波高まったので避錨す(阿波連港)
- 12月15日 前日同様
- 12月16日 海上注意報解除をヨソにて踏取したので漁夫10人備入し午前10時55分阿波連港を漁場向出発
- 12月17日 午前10時風向は南より北西に急変し天候次第に悪化し海上は白波が立ち始めて来たので荒天準備を整えた上附近の表面水温の変化状況を調査しつつ現計路(NW)にて航走したが風波は高まる一方で本船の速力も半減し、午前零時頃目的漁場到着予定の処午後3時頃に延び、試験操業も無印を生ずると考えたが折角漁場迄到着し即座に引返すのを遺憾に思い、東経124°-45' 北緯28°-05'の地点に於いて午後4時20分より集魚灯の点灯及び撒餌を逐し乍ら7時10分迄試験操業したが集魚する傾向は全くなかった。水温13.2°以後漁場を南々西距離約8里の地点に於いて再び調査したが当時から大時化となり帆帆(三角帆)用マスト折損し操業不能となった為止むなく帰路につき12月19日午前2時阿波連寄港、臨時漁夫解雇し午後2時泊港に帰港した。

1. 海洋観測 別表参照
1. 漁場及び航跡 別表参照
1. 所 感

第1次試験の際は順調に漁場を探察する事が出来たが漁場は例年と比べて殆んど変動がない様に考えられたが発電機故障のため漁獲試験を実施する事が出来ず、又2次試験は同様な季節風に遭い船尾の三角帆用マスト折損し操業不能となり何れも調査不十分で初期の目的を果す事が出来なかった。

海産資源 (第2次)

月日	時刻	天候 雲量	風向 風力	気温	気圧	視程 (20)	水色	水温	比重	位置	備考
1957年 2月6日	8h	B0	NE	23.1	1023.0						
* *	12h	B0 0	NE 4	23.9	1022.4	3 2	3	23.8	2667		
* *	15h	B0 4	NE 3	21	1019	2 2	2	23.7	2681		
* 17日	8h	0 8	N 4	19.4	1019	3 2	2	21.2	2557		
* *	12h	0 9	N 4	20.6	1016	3	3	19.0	2566		
* *	15h	B0 0	N/E 5		1020	4 3	4	18.7	2579		
* 18日	8h	0 8	N 7		1020	5 4		21.7			
* *	12h	B0 7	N 7	17.5	1024	6 4	2	22.4	2619		
* *	15h	B0 8	N 5	18.1	1023	5 4	2	22.2	2614		

第1, 2次秋刀魚回游状況調査

第1次試験 調査船 かもめ丸 (4屯22, 15HP)

I 期間 自1958年2月4日 至2月9日 6日間

II 乗組員

(イ) 調査員 当真波手祐, 当真機士 2名

(ロ) 臨時漁夫 長浜, 大城 計 4名

III 調査の概要

(イ) 具志頭村港川 (SE) 南東5-6流沖合から知念岬南東4-5流近海

(ロ) 調査方法及び結果

ナイロン3枚網地の高さ6尺網目8節, 長さ16尋, 数量10統を用い日没から夜明迄潮流を横断して投網し流圧され乍ら魚群の回游状況を探り得ようとしたもりである。

(ハ) 結果

自然回游している秋刀魚は港川方面の羽舟漁業者がとび魚流刺網漁業博覧中時々「とび魚」に混つて2, 3尾の「さんま」が採捕されている。

状況から推して夜間は「とび魚」魚場3～5連沖合を回遊している事が判断されたので2月4日午後5時3分から8時24分迄に港川南東距岸5連沖合で投網を終え翌朝迄潮流に流置され乍ら久高島沖に至る沿岸よりの調査を実施したが網の数量が少ない為と潮流の関係で投網1時間後には両端の網が1箇所に片寄るので時々網成りを直して操業したが天候悪化模様に伴って午後10時5分から10時30分迄に揚網を完了し島嶼に避難しようとしたが揚網中スクリーンツヤマトに絡糸150本合を巻付かして前進不能となつたので大城電機を潜らせて切断に努力させたが動搖と水中目鏡がなく手探りの為切り放す事が出発し止むなく応急措置をとり機関を反而にして久高口を通過して一夜を明かし2月5日久高島に接近し浅所にて罾を放そうとしたが風向が上手の為たどり着く事が出来ず下手の安庫間に約18前の電力で無事到着し水中目鏡を借用して完全に取除いた。当時風程の矢先にあつたので再天港に避難、翌6日久高島沖に於いて水中集魚灯 $\frac{120V}{200W}$ を用いて秋刀魚の集魚状況を調査しようとしたが発電機の故障で同調査も失敗に終り止むなく調査を打ち切つて泊港への帰途時化られ港川に避難2月9日天気回復と共に泊港に帰港した。

第2次試験 調査船 かもめ丸 (4屯22 15HP)

I 期間 自1958年2月15日 至 同年2月16日 2日間

II 乗組員 (イ) 調査員 前回同様

(ロ) 臨時漁夫 2名 (港川より雇入)

III 調査概要

(イ) 調査範囲

喜望峯岬、南東距岸300～500米沿岸から港川南東距岸3連の沖合

(ロ) 調査の方法

平常な天候の為昼間は浮上回遊群の発見に努め夜間はナイロン3枚網 (前回同様) と従来試作した。さんま産刺網9枚細目8厘、長さ15～16尋、高さ4間の網地を併用して前回同様の方法で実施した。

IV 結 果

前回に漁具と天候に左右され充分な試験を実施する事が出来なかつた為秋刀魚群の集魚状況及び該魚群の遡遊関係を把握する事が出来ず予期通りの成果を収める事が出来なかつたが2月15日泊港より港川向け航行

中喜屋武岬沿岸、摩文仁岬沿岸、港川兩岸の其れへ3ヶ所の地点に於いて昼間大群の早上回游群を発見し又同魚群の回游方向も確認しましたので港川より2名の漁夫を雇入し前記発見位置附近に於いて午後6時57分から同7時40分迄に投網を終え状況を調査しようとしたが投網20分後には網は沈下してしまつたので操業不能となり20時30分から22時迄揚網を完了し翌12日泊港へ帰港した。

1. 発見した魚群の回游状況と海況

発見年月日	1958年2月15日		
位置	喜屋武岬 南西沿岸 300米	摩文仁岬南方 距岸400米	摩文仁、港川中間 距岸400米
時刻	15時05分	16時35分	16時
群の大小、及 濃	大 濃	大 濃	大 濃
魚体の大小	大	大	中~小
游泳層	上 層	上 層	上 層
回游方向	西	西	東北東
水温	21.2℃	21.2℃	21.2℃
雲量	8	2	6
天候	晴	晴	晴
風向	NE	ENE	NE
風速	1	1	1
波うね	1	1	1

1. 所 感

- (1) 2月15日に発見した秋刀魚は魚体の大きい2群は慶良間南西方面に回游しており季節の為の下り魚群と推定されるが港川南岸(距岸400米)附近で発見した秋刀魚は魚体が小さい様に見受けられ、回游状況は北上する傾向にあるが、はたして沖縄南部近海で生長したものかどうか判定しにくい。(今後調査を重ねていく事によつて明らかにされよう。)
- (2) 前記の通り回游状況を発見する事が出来たが夜間の寛刺網で実物を採捕し魚体調査を実施し今後の調査の基礎資料に供し得いたと考えたが漁具不備の為漁獲する事が出来なかつたのは遺憾に堪えない。